

## Kelly Blue ~Tribute To Wynton Kelly

ケリー・ブルー ~トリビュートトゥ・ウイントン・ケリー

### Dan Nimmer Trio

ダン・ニマー・トリオ

#### 1. ノー・ブルース

No Blues 《M. Davis》(5:24)

#### 2. プリムシャ・マン

Brimsha Man 《D. Nimmer》(5:38)

#### 3. 晴れた日に永遠が見える

On A Clear Day 《B.Lane》(3:52)

#### 4. クイック・ジャンプ

Quick Jump 《D. Nimmer》(2:41)

#### 5. クローズ・ユア・アイズ

Close Your Eyes 《B. Petkere》(5:04)

#### 6. エリナー

Eleanor 《J. Cobb》(5:11)

#### 7. ケリー・ブルー

Kelly Blue 《W.Kelly》(5:04)

#### 8. 山道を行く

On The Trail 《F. Grofé》(5:51)

#### 9. イフ・ユー・クッド・シー・ミー・ナウ

If You Could See Me Now 《T. Dameron》(5:59)

#### 10. 枯葉

Autumn Leaves 《J. Kosma》(5:16)

#### 11. テンバランス

Temperance 《W. Kelly》(6:49)

**ダン・ニマー** Dan Nimmer 《piano》**ジョン・ウェバー** John Webber 《bass》**ジミー・コブ** Jimmy Cobb 《drums》

録音：2006年3月25、26日 ザ・スタジオ

© 2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

### \*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan
Recorded at The Studio in New York on May 25 & 26 , 2006
Engineered by Katheline Miller
Mixed and Mastered by Venus Hyper Magnum Sound：
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Artist Photos by Mary Jane
Designed by Taz

するのは困難ということなのだろう。ダン・ニマーのケリーばりのピアノを初めて耳にしたとき、うれしくなってしまった。ダン・ニマーはケリーのスイング感やスピード、ファンキー・フィーリングなど身に付けている。優れたテクニックと豊かなジャズ・フィーリングの両方をあわせ持ち、並外れた才能を感じさせる。物真似やコピーの域から出るのに苦勞する新人ミュージシャンは少なくないが、ダン・ニマーはウイントン・ケリーからの影響を昇華、その上でケリーから学んだピアノ・スタイルをベースにしながら、現代的なピアニズムを身に付けている。

ダン・ニマーは1982年ウィスコンシン州ミルウォーキー生まれ。10歳の頃からピアノを始め、ミルウォーキー音楽院でピアノ講師を務めるジャズ・ピアニスト、マーク・デイヴィスからクラシックとジャズを学んだ。高校卒業後、シカゴの北伊利ノイ大学へ進学。同大学でジャズ・ピアノを学び、同時にシカゴのジャズ・シーンで本格的な活動を始めた。そして、2004年にニューヨークへ進出。自己のピアノ・トリオなどで活動するとともに、2005年3月からウイントン・マルサリスの元で活躍している。ウイントンはダン・ニマーについて、マイルスがウイントン・ケリーについて語ったように、「ダン・ニマーのプレイはリズムに火を点け、想像力にあふれている」とコメント。今後の活躍が最も楽しみな新人ピアニストである。

ノー・ブルース　マイルス・デイビスの作曲。ウイントン・ケリーが在籍中のマイルスのアルバム『ブラックホークのマイルス・デイビス Vol.1』『アット・カーネギー・ホール』、マイルス・バンド独立後の『ハーフ・ノートのウェス・モンゴメリーとウイントン・ケリー』などで取り

上げられた。マイルスは「プフランシング」(Pfrancing)という曲名でも録音している。ダン・ニマーはケリーばりのフレーズを連発させながら急速調のアドリブで魅了する。

プリムシャ・マン　ダン・ニマーのオリジナル。マイナー調のブルージーなナンバーで、ウイントン・ケリーが好みそうな曲調である。ニマーは作曲も演奏もジャズ・センスが抜群にいい。“プリムシャ・マン”とは、ウイントン・ケリーのニック・ネーム。

晴れた日に永遠が見える　ミュージカル『オン・ア・クリア・デイ・ユー・キャン・シー・フォアエバー』(1965年)のタイトル曲。作曲はバートン・レーン、作詞はアラン・ジェイ・ラーナー。ウイントン・ケリーは66年の『フル・ビュー』などで取り上げ、得意レパートリーにした。

クイック・ジャンプ　ダン・ニマーのオリジナル・ブルース。ニマーは優れたテクニクを示しながらアップテンポでノリまくる。

クローズ・ユア・アイズ　女性作曲家バーニス・ベトケレが1933年に単発で出版したナンバー。ダン・ニマーのスインギーな歌心あふれるアドリブが楽しめる。ウイントン・ケリーの影響も所々にみられる演奏だ。

エリナー　ジミー・コブのオリジナル。コブの最近のリーダー・アルバム『Marsalis MusicHonors Jimmy Cobb』に収録されている。コブが亡き姉妹(おそらく妹)Eleanorへ捧げたスロー・バラードで、ダン・ニマーは軽快なテンポに変えている。ニマーがここでみせる強さのあるピアニシモの演奏もケリーを思い起こさせる。

ケリー・ブルー　ウイントン・ケリーが絶頂期に残した代表作『ケリー・ブルー』(1959年)のタイトル曲。ケリーのブルージーな魅力が反映されたオリジナル曲だ。

山道を行く　ファーディ・グローフェが作曲した「グランド・キャニオン」組曲(1933年)から生まれたスタンダード・ナンバー。ウイントン・ケリーはアルバム『イツ・オールライト!』(1964年)などで取り上げた。山登りを思わせる軽快なナンバーだ。

イフ・ユー・クッド・シー・ミー・ナウ　ウイントン・ケリーが得意曲にしたスタンダード・ナンバーで、アルバム『ハーフ・ノートのウェス・モンゴメリーとウイントン・ケリー』などで取り上げている。ジャズ・ピアニスト/作曲家のタッド・ダメロンが、サラ・ボーンのために作曲した美しいバラード。ダン・ニマーのタメを効かせたバラード演奏が印象深い。

枯葉　ジョセフ・コスマが作曲したシャンソンの定番曲で、ウイントン・ケリーがこの曲をピアノ・トリオ編成で取り上げたアルバム『枯葉』(1961年)は、ケリーの生涯を代表する人気アルバムになった。ケリーが在籍した時期のマイルス・バンドの得意レパートリーでもある。ピアノ・トリオの名演が数多く残されている曲で、ダン・ニマーのこの演奏も素晴らしい出来映え。

テンバランス　ウイントン・ケリーが作曲したオリジナルで、彼のピアノ・トリオ・アルバム『ケリー・アット・ミッドナイト』(1960年)に収録されている。ケリーを信奉するダン・ニマーらしい選曲であり、抜群にノリのいい演奏を聴かせている。

(高井信成)

昨年、ヴィーナスレコードからアルバム『ティー・フォー・トゥー』でデビューを飾ったダン・ニマーは、将来有望な新人ジャズ・ピアニストであるが、実はすでにジャズ・ファンどころか世界中の人々がダン・ニマーを聴いているのである。ウイントン・マルサリスが出演するアップル・コンピュータのiPodのTVコマーシャルをご存じだろうか。ダンス・ミュージック調のジャズが演奏されるあのCMのピアニストがダン・ニマーなのである。あれはウイントン・マルサリス・カルテットで収録されている。曲名は「Sparks」。ダン・ニマーはウイントン・マルサリス・カルテット/クインテット、ウイントン率いるリンカーン・センター・ジャズ・オーケストラのピアニストでもある。ウイントンは複数のメンバーを起用するので固定ではないようだ。

そんな、今、大きな注目を浴びている新人ジャズ・ピアニスト、ダン・ニマーがウイントン・ケリーへ捧げたアルバムがこのヴィーナスレコード第2弾の『ケリー・ブルー』である。ダン・ニマーの前作のヴィーナスレコード第1弾『ティー・フォー・トゥー』は、デヴィッド・ウォン(ベース)、ビート・ヴァン・ノstrand(ドラム)からなるダン・ニマーのレギュラー・トリオで2005年8月22日に録音された。収録曲はオリジナルとスタンダード・ナンバーだった。今回はベースにジョン・ウェバー、ドラムにジミー・コブを迎えた。1929年ワシントンD.C.生まれのジミー・コブは、今や“伝説のジャズ・ドラマー”として語られる大ベテランであり、ウイントン・ケリーとともにマイルス・デイビス・クインテットで活躍。マイルス・バンドから独立後は、ウイントン・ケリー・トリオのメンバーになった。いわば、ウイントン・ケリーを最もよく知るドラマーである。ジョン・ウェバーは1965年セントルイス生まれで、ジミー・コブ率いる“MOB”、エリック・アレクサンダーなどのグループで活躍。ヴィーナスレコードのアレクサンダーの作品にも参加している。

さて、ダン・ニマーが理想的なメンバーを迎えて録音されたこのウイントン・ケリー・トリビュート作品。元々、ダン・ニマーはウイントン・ケリーを信奉するピアニストであり、彼の魅力を十二分に引き出したアルバムである。ケリーをほうふつとさせるダン・ニマーのピアノ・プレイは、デビュー前から彼を知るジャズ関係者から話題になっていたようだ。言うまでもなく、ウイントン・ケリーはモダン・ジャズ、あるいはハードバップ/ファンキー・ジャズの最高のピアニストのひとりである。1950年代の末から60年代の初めにかけて在籍したマイルス・デイビス・クインテット時代はもちろんのこと、リーダー作を含む、ハードバップ時代に録音された数多くのジャズの名盤で輝かしい名演を残している。もし、ウイントン・ケリーが存在していなかったら、ハードバップという豊かな実りの時代にポッカリと穴が空いてしまうような気さえする。ケリーのようなピアニストがもっといれば、ジャズの世界はもっと豊かなものになるに違いない。マイルスが残した「ケリーはマッチのように演奏に火を点ける」という言葉が有名になったが、ケリーは一瞬でバンド・サウンドを変えることのできる天才肌のピアニストである。スインギー、ブルージー、ファンキー、そのどれもが天下一品であり、最高にスイングする最高のグルーヴ・マスターでもある。スイングとグルーヴの二つを完璧に両立させた希有なジャズ・アーティストだ。

不思議なのは、そんなウイントン・ケリーのピアノを継承するようなジャズ・ピアニストが少ないことだ。それだけケリーの影響を自分のものに